



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内(担当:蛭川明男牧師) / ●世話人会代表 加藤 誠
●事務局長 播磨 聡(広島キリスト教会 TEL 082-293-8683)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

「和解は可能なのか？」

佐々木 和之
ささき かずゆき

皆さまこんにちは！昨年10月にプロテスタント人文社会科学大学(以下PIASS)を卒業し、大学付属の「持続可能な平和と開発のための行動研究センター」(以下、「平和と開発センター」)の職員になったフロリアン・ニュンゲコさんと一緒に、11月初旬から約1カ月間、日本の各地で活動報告に従事し、12月にルワンダに戻ってきました。とても豊かな出会いと学びが与えられ感謝しています。私たちの滞在中、各地でお世話いただいた皆さま、ありがとうございました。

和解は可能なのか？

新年最初の私の仕事は、ルワンダ、ブルンジ、コンゴ民主共和国、タンザニア、日本からの学生たち計22人を対象にした「和解の理論と実践」という集中講義でした。

第三日目の土曜日には大学から一時間のところにあるムランビ虐殺記念施設を訪ねました。1994年当時、この場所には学校があり、そこに避難していた4万人ものツチの人々が、政府によって動員されたフツの人々によって斬殺された現場です。記念施設訪問の後半、元学校の校舎に案内されました。一つ一つの教室に多数の犠牲者の遺体が並

べられていました。腐敗防止のために石膏が吹きかけられ、真っ白になっている遺体の数々。中には幼子の遺体もありました。

教室の中に入る者はほとんどなく、並べられている遺体を右手に見ながら通路を通り過ぎました。ジェノサイドを体験し肉親を失った二人の学生は泣き崩れ、しばらく立ち上がることができませんでした。彼らの肩を抱きかかえたり、周りで見守ったりして過ごした私たちは、ジェノサイドを生き残った仲間たちが、24年後の今も癒されることのない傷と痛みを持ち続けている現実を目の当たりにしたのでした。その後の分かち合いの時間では、「虐殺後の和解など想像がつかない」といった感想を話す学生たちが少なくありませんでした。

その後の授業では、和解が長い時間を必要とするプロセスであること、そして、その可能性がひらかれていくために必要である「真実」、「正義」、「癒し」といった一つ一つの課題にどのように取り組んでいくのかについて学びました。

講義の終盤には昨年につき、キレヘ郡ルガンド村で和解の歩み続ける方々をお招きしてお話を聴きました。今年は、サラビアナさんとタデヨさ

んに加え、昨年 10 月にサラビアナさんとの和解を成し遂げられたアンドレさん（ウブムエ 40 号参照）にも来ていただくことができました。今回の集中講義に参加した大半の学生たちにとって、自分たちの目の前で虐殺の加害者と被害者が隣同士で座っているのを見るのは生まれて初めてのことでした。

ナタで顔面を切り付けられながらも九死に一生を得、その襲撃に関わったタデヨさんとアンドレさんを赦したと語るサラビアナさんの言葉はにわかには信じ難いことであつたでしょう。タデヨさんやアンドレさんの謝罪が本物なのかどうかを見極めるため、厳しい質問を投げかける学生たちもいました。しかし、一つ一つの質問に真正面から答える 3 名の言葉と態度が持つ真実性は、そこに集う多くの私たちの心に、「和解は難しい。しかし可能なのだ」という確信を与えるのに十分なほど力強いものでした。「和解の可能性」について疑心暗鬼だった学生たちの多くが、この方々の歩みから大きな希望を受け取りました。

その翌日、集中講義の最後の授業には平和紛争研究学科の卒業生、アリスさんを招いてお話を聴きました。以下は彼女が語ってくださったことの要約です。

ジェノサイドが起きた当時アリスさんは 11 歳で、父親、継母、二人の兄弟と暮らしていました。彼女の父親はフツでしたが、病弱であったためほぼ寝たきりの生活で、虐殺には加担しませんでした。ツチであった継母は父や父の親族にかくまわれて虐殺を生き延びました。

虐殺の終結後、悲劇が彼女の家族を襲いました。生き残ったツチの人々が彼女の家に押し入り、父親を裸にして縄で縛りあげ連れ去ったのです。襲撃者の許可を得て家族との面会を許された父親が言い残した言葉を、彼女は今もはっきりと覚えています。それは、「誰も憎んではいけないよ」との言葉でした。それっきり父親は帰らぬ人になりました。

虐殺後、彼女は二人の兄弟とともに父方の親族



<キレへの方々を招いての特別講義の後で>

の家を転々とし、苦勞してなんとか高校を卒業しました。貧困のゆえに多くの女性たちが身を売って生活せざるを得ない状況に追い込まれていることを知った彼女は、神様に「私に夫を与え、家庭を持たせてください」と祈りました。その後、教会の聖歌隊で知り合った男性からプロポーズされました。彼がツチの生存被害者であったことから、双方の親族から猛反対されましたが、神に祈って与えられた男性だとの確信から、彼女に迷いはありませんでした。二人は結婚し、その後、二人の子どもたちにも恵まれ、保険会社に職を得る事ができました。

2011 年、大学に社会人入学した彼女は、和解の授業の一環として実施された「癒しのセミナー」に参加しました。その中で、親族の遺体が見つからず、埋葬を済ませられずにいた他の学生たちと共に仮想の埋葬式を行いました。彼女はその際、用意されていたユリの花を一つ、父親へのお別れの言葉と共に手向けたのでした。

その後、癒しと和解のために活動する NGO での研修を受け、さらに深い癒しを経験した彼女は一大決心をしました。親族の反対を押し切り、父親を殺害した男性の一人を訪ねることにしたのです。勇気を振り絞って男性との再会を果たしたその日、彼女は「もうあなたを憎んでいません」と伝えたのでした。二人の間にはその男性が亡くなるまで交流が続きました。

この彼女の語りは、学生たちに様々な意味で衝撃を与えました。まず第一に、ルワンダではタブー中のタブーとされている、虐殺の報復としてツ

チから殺されたフツの人々について彼女が語ったからでした。それは、「ツチに対するジェノサイド」という公式な歴史認識を否定し、ツチとフツが殺しあったという「ダブル・ジェノサイド」を主張する言説と見なされかねないため、人々は処罰を恐れて口をつぐんでいるのです。第二に、フツとツチという異なるエスニック集団間の婚姻は、未だに決して容易なことではないからです。本人同士が結婚を望んでも、お互いの親族に認めてもらえないことが少なくないのです。第三に、父親の殺害に関与しながらも謝罪していない加害者に彼女が自ら歩みより、「赦し」を与えたという証言は、大きな驚きを与えるものでした。

アリスさんがとてもセンシティブな事柄に触れることになると予想していたため、彼女が語るのを祈るような気持ちで見守っていた私でしたが、学生たちが彼女の話をしっかり受け止めてくれたことが分かり、ほっと胸をなでおろしました。虐殺記念施設を訪問した時に泣き崩れ、「加害者を赦すなど考えられない」と語っていた生存被害者のアスムタさんは、「あなたのお話を聴けて本当に良かった。私はもっとこのような話を聴きたいと思います」とアリスさんに話しかけました。父親と兄弟姉妹を虐殺で殺されたアスムタさんが、フツの人々の苦しみに共感することができたのは、今回が初めてのことでした。

1959年、ベルギーからの独立前夜の争乱時にルワンダを追われ、タンザニアで難民生活を強いられたツチの両親を持つシュクルさんは、「私はこれまで片方側の話だけを聞かされて生きてきました。しかし、今日で全てが変わりました。本当の和解のために、私たちはお互いの経験を分かちあっていかなければなりません」と語りました。集中講義の前半、「和解なんてドラマみたいなもの。皆が役割を演じているだけ」、と厳しい顔で語っていた彼女が、最終日には「和解は可能だと知った」と満面の笑顔で語ることになるなど、誰に想像できたでしょうか。

ルワンダで平和と和解について深く考え、語り合うことは、実はとても緊張感を伴うものなのです。特に人前で語ることが許されていない事柄についてどこまで深く語り合うことができるかは、私と学生たち、そして学生たち同士の信頼関係に大きく左右されます。最終学年の学生たちへの最後の授業に、これまでで一番深く語り合えたことに、喜びと希望、そして私たちを導いてくださった神様への感謝の思いに満たされました。

ニャンザの女性たち続報

ジェノサイドの生存被害者である女性たちと加害者を家族に持つ女性たちの協働グループとして結成されたウムチョ・ニャンザ（ニャンザの光）は、昨年9月から11月、佐々木恵と日本人留学生の指導を受け、アフリカ製のカラフルな布「キテング」を使ってのブックカバー制作に取り組みました。出来上がった120枚のブックカバーは、私と恵の日本滞在中に完売しました。収益金の約9万円はメンバーに配分され、国民健康保険の支払いに充てられるなど、女性たちの家族の生活向上に役立つものとなりました。

現在ウムチョ・ニャンザの女性たちは、花の手入れのために週一日、ブックカバー制作のために週一日の協働作業を続けていますが、今後は小物入れ、バッグ、ドライフラワーを使ってのアクセサリーの制作にも取り組んでいく予定です。私の学生や同僚たちの助けを得ながら、手芸・洋裁技術の向上、切り花や手芸品のマーケティング、さらには協働組合設立にむけての規約作りや会計システムの整備などの支援を行っていきます。

また昨年8月からは、彼女たちが続ける癒しと和解の歩みが広がっていくように、彼女たちの子どもたちである中高生を対象に関係づくりのための活動が始まりました。今までの「お花畑プロジェクト」という名称を改め、今後は「ニャンザの光」平和・生活向上プロジェクトとして進めていきますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

「破壊の後に芽生える命」

フロリアン・ニュンゲコ

フロリアンさんは、ブルンジから留学生として PIASS 平和紛争研究学科で学び、昨年 10 月卒業されました。現在、PIASS 平和と開発センターで佐々木さんの同僚として勤めています。2017 年 11 月から約 1 カ月間、佐々木さんと共に来日され、各地で講演されました。日本で考えたことを寄稿していただきました。

昨年の 11 月から 12 月の約 1 カ月間、私は日本各地を訪問し、様々な経験をすることができました。伝統的な日本庭園、東京のような近代都市、神社、マクドナルド、ゲームセンターなど、私にとっては初めて目にするものばかり。電車で移動中に食事をするという不思議な体験もしました。そして、多くの教会や学校を訪ねてルワンダのことや PIASS のこととお話しし、いくつかの大学では祖国ブルンジの紛争と平和について講義をしました。多種多様でどれも新鮮な経験でしたが、その中で私は 1) 分かち合い、2) 学び、3) 大切な決心をすることができたことに感謝しています。

1) アフリカ大湖地域について分かち合う

最初に私が多くの人々の前で話をさせていただいたのは沖縄でした。沖縄の方々から戦争による凄まじい暴力を経験されたばかりか、今も島じゅうにある米軍基地を通して暴力にさらされていることを知り、私に何を語り得るのかとたじろぎましたが、暴力紛争が繰り返されてきたアフリカ大湖地域から来た私自身の物語と沖縄の人々の物語を重ね合わせながら、祖国ブルンジで平和を創るために何がなされているのかについてお話ししました。

広島では、広島市立大学の学生さんたちに「ブルンジの平和構築」というテーマで講義をしました。私はブルンジの歴史について語るとき、度々心が痛みます。それは、ブルンジでこれまで多くの暴力的な出来事が続いてきたから

です。しかし私は、ブルンジが持つ負の歴史についてだけでなく、平和への展望についても分かち合いました。学生さんたちの質問から、彼女たちがアフリカの暴力的な側面ばかりではなく、人々や文化についても関心があると知り嬉しかったです。

広島キリスト教会では、私の卒業研究のテーマである虐殺被害者と加害者の和解についてお話ししました。卒業研究では、佐々木先生が関わってこられたキレヘ郡で和解の歩みを進める人々から聞き取り調査をしたのですが、その方々と交わした「皆さんから聴いたお話を人々に伝えます」との約束を果たすことができ感謝でした。

2) 沖縄と広島から学んだこと

沖縄では非暴力による反基地運動に取り組まれた阿波根昌鴻（あはごんしょうこう）さん、そして、今も米軍基地の前で続く非暴力抵抗運動に大きな感銘を受けました。阿波根昌鴻さんは、一切の暴力の行使を拒否したばかりか、暴力のむごたらしさ、そして非暴力で暴力に打ち勝つことの大切さを人々に気付かせるため、伊江島に反戦平和資料館を設立されました。私はその資料館の館長で、生前の阿波根さんと共に活動された謝花悦子（じゃはなえつこ）さんから直接お話を聴かせていただきました。謝花さんはお若い頃に足の病気になられたのですが、十分な治療を受けることができず足が不自由になりました。医薬品が兵隊のためだけでな

く一般市民のためにも残されていたなら自分の足が完治していたことを知り、戦争を憎んだことが平和のために働きはじめた原点だと話してくださいました。この他にも多くのお話を聴かせていただきましたが、戦争体験に裏打ちされた反戦平和への思いと行動の力強さに心を打たれました。

沖縄滞在中には米軍新基地建設反対運動が続けられている名護市辺野古を訪ね、ボートに乗船しての海上抗議行動と基地ゲート前での座り込みにも参加しました。アフリカでは市民による政府への抗議行動が厳しい弾圧を招きます。ですから、抗議行動を監視する大きな巡視船が私たちの小さな抗議船に近づいてきた時など、私は恐怖で身震いがしました。しかし、他の抗議参加者が私に語ってくれた「不正義と暴力を前に怖がる必要はない。私たちは非暴力を貫くのみ」という言葉に勇気づけられました。

広島では小倉桂子さんという被爆者の方から直接被爆証言を聴かせていただくという幸運に恵まれました。小倉さんからお話をうかがいながら、二つのことに気付きました。第一は、原子爆弾の影響は決して肉体的なものに留まらないということです。原子爆弾が被爆者の肉体を破壊しただけではなく、心理的にも社会的にも様々な悪影響を与えたことを知りました。第二は、小倉さんが「それは起きたのです」と繰り返し語られたことでした。小倉さんが「それは起きたのです」、「本当に起きたのです」と繰り返されるのを聞き、私は、被爆者の方々が体験された想像を絶する一つ一つの出来事が「本当に起きたのだ」ということを知らなければならない、無かったかのように済ませることは許されないのだと感じました。

そして私は小倉さんが将来への希望を語られたことに感動しました。彼女が経験された筆舌に尽くしがたいいかなる苦難も、破壊の後にも命が芽生え、より良い未来が実現し得るという彼女の信念を奪いさることはできなかったのだ

す！私はルワンダに帰国した後、小倉さんから学んだことをブルンジ人やルワンダ人の友人たちに分かち合いました。ブルンジ人の友人は、「広島は 1945 年に破壊しつくされてもう何も残っていないと思っていた」と言いました。今、広島は単に原子爆弾を投下された都市ではありません。あれから 72 年が経ち、広島は勇気と希望の物語になったのです。その物語を語り継ぐことにより、私たちは人類の未来のために必要な大きな変化をもたらすことができるはずです。広島の話から数えきれない人々が、暴力と破壊の後に癒しと再建が可能であることを知ることができるのです。



<伊江島・ヌチドゥタカラの家を訪ねた筆者>

3) 日本訪問から得た決意

沖縄、広島、そして他の訪問地において、私は多くのことを学び、分かち合うことができました。また同時に、私自身がどのように変わらなければならないのかについて多くの示唆を得ることができました。日本を訪問する前まで、私はアフリカ大湖地域の外の平和構築についてはあまり関心がありませんでした。しかし、広島での経験は、壮絶な暴力を経験した後に、平和への願いを込めて資料館や公園を作ることを意味について深く考える機会を与えてくれました。そして、私は核兵器の脅威について、アフリカの友人たちに伝えていく決心をしました。アフリカで核

兵器の存在や脅威について知っている人はごく少数です。核兵器廃絶のための運動に関わっている人々は皆無に近いように思います。現在、アフリカに核保有国はありません。決してそのような国が生まれないように、私たちアフリカの市民がまず核兵器の問題について知らなければなりません。

広島の小倉桂子さん、そして沖縄の謝花悦子さんは、反戦平和のために生涯を捧げて来られました。お二人と出会い、私はアフリカ大湖地域における平和構築への献身の思いを新たにしました。また私は、たとえ小さなことであっても、他の人々の命にとって意味のある様々な取り組みのために日常的に参加していこうと決意しました。これは、日本での教会訪問を通し、そこに集う方々がルワンダ、カンボジア、インドネシアなどの国々のために祈り、支援しておられる様子を直接見て与えられた決心でもある

のです。

最後に

今回の日本訪問は、多くの大切なことを学ぶ旅となりました。平和をつくるために何ができるのかについて貴重な示唆をいただくとともに、「破壊の後に芽生える命」が実際に可能であることをこの目で確認することができたことに感謝しています。この旅で学ばせていただいたことを、今度は私が他の人々を励まし動機付けるために用いていきたいと思います。私に多くの気付きを与え、励まし、そして、私のために祈ってくださった皆さまに感謝申し上げます。日本滞在中、多くの日本の皆さまが私を心から歓迎しお世話をしてくださいました。私も皆さまのためにお祈りすることを約束します。皆さまに神さまの祝福が豊かにありますように。

(翻訳・佐々木和之)

向地 由

むこうじ ゆい

「託された者として」

皆さまこんにちは、広島市立大学4年の向地由と申します。私は2017年2月に約1年間のPIASSへの留学を終え、ルワンダから帰国して既に1年が経とうとしています。今回はルワンダでの学びを振り返りつつ、フロリアンさんと共に沖縄と広島を訪れて考えたことについて綴ります。

私は紛争を経験した現場で平和や紛争について学びたいという思いからルワンダへ留学しました。留学では大学での講義だけではなくピースクラブの活動への参加、キレヘやニャンザへの訪問など、本当に貴重な経験をさせていただきました。その中で、自国の問題について考え、平

和のために行動するクラスメートたちに刺激を受けるとともに、改めて自分が生まれ育った広島や日本のことを振り返るようになりました。帰国してからもこの学びを活かして平和活動に携わり続けたいと思っていました。

留学が終了してからの1年間は、多くの人々と関わりながら身の回りの問題について「学び直した」時間でした。昨年11月には佐々木先生ご夫妻とフロリアンさんが来日し、共に沖縄・広島での平和学習に取り組みました。以前修学旅行で訪れたことのあった沖縄を再び訪問しようと思った契機は、PIASSで受けた「非暴力の理論



<フロリアンさん、元留学生の北村さんと筆者（写真左）>

と実践」という授業で沖縄の非暴力抵抗について調べたことです。その時から、もう一度沖縄戦を学び直し、在日米軍基地が集中する沖縄の現状を見たいと思っていました。

今回の訪問では平和祈念資料館の見学、アブチラガマの訪問、また辺野古基地建設現場での抗議運動に参加しました。特に印象的だったのは、アブチラガマの訪問と抗議運動への参加です。暗くてジメジメとしたガマの中を歩いていた時、当時ガマで救護にあたったひめゆり学徒の少女たちのことを想像しました。真っ暗闇の中で多くの人々が死にゆき、敵からの攻撃に怯えながら病人たちの排泄物を地上へ運んでいたというお話を聞き、本当に胸が苦しくなりました。先の見えない過酷な日々を生きることがどれだけ辛かったか。私だったら生きることを諦めてしまっていたかもしれない。しかし、暗闇の中で地上から射す一筋の小さな光を見たとき、「絶望の中にある希望」という言葉が思い浮かびました。もしかすると彼女たちはその光を一縷の希望として捉えていたのではないかと思います。このような出来事が二度と起きてはならないと強く感じた出来事でした。

そして辺野古での抗議運動の参加では複雑な感情を抱きました。基地建設現場で働く人、反対運動に参加する人、また反対運動を阻止する人も沖縄の人々だったからです。なぜ沖縄の人

同士が争わなければならないのだろうと強い憤りを感じました。ある参加者から「もっと本土の人に関心を持ってほしい」という言葉をかけられ、沖縄にもっと関心を持たなければと思いました。沖縄で起きている問題は私たちに無関係ではないこと、また平和を学ぶ者として常に考えていかなければならない問題であると強く実感しました。

また今回の訪問は親友であるフロリアンさんと共に沖縄や広島について学ぶという大変貴重な機会でした。フロリアンさんは資料館にある資料の一つひとつを丁寧に読み、相手のお話をじっくり聞き、一生懸命勉強していました。沖縄戦や原爆の悲惨さに強く共感し、「絶対に繰り返してはいけない」と語った彼女は、きっとこの学びをルワンダや祖国のブルンジで活かしていくだろうと思います。



<キャンドルイベントにて被爆者の方々と>

最後に、私にとって印象的だった広島での出来事についてご紹介します。昨年12月、核兵器禁止条約の実現を働きかけてきた国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN)」がノーベル平和賞を受賞しました。これを祝福するため、広島若者が中心となって原爆ドーム前でキャンドルイベントを行いました。高校生からお年寄りの方まで総勢100名の方が参加して下さいました。キャンドルイベントを通じて様々な方と出会い、学ぶことができました。そしてある被爆者の方に「若い人が（こういう活動に）来てく

れることが私らにとって希望なんよ。ありがとう。」と言われた時、私は何かバトンを受け継いだような気がしました。今回のイベントを通じて、これまで核廃絶に向けて地道に歩いてこられた被爆者の方々への感謝の気持ちと、広島 of 若者としてその意志を引き継ぐという使命感を持ちました。このような経験の中で、以前佐々木先生が仰っていた「ルワンダの経験から学ぶことは、広島においてどのような意味を持つの

か」という問いを改めて考え直しています。ヒロシマにルーツを持ちルワンダで平和について学んだ者として、きっと何か平和への働きが託されているのだと思います。今春からは社会人になりますが、仕事だけではなく、自分にできる形で少しずつ平和に関わり続け、託された者としての役目を果たしていきたいと思いま

事務局からのお知らせ

● 2015年2月から「お花畑プロジェクト」への寄付をお願いしてまいりました。3ページの佐々木さんの文章にあるとおり、「ニャンザの光」平和・生活向上プロジェクトとして実施されています。お寄せいただきましたご寄付は、このために用いさせていただきます。これまでのご寄付(859,826円、2018年1月現在)を感謝いたします。

● 昨年3月にNHK BS-1で放映された佐々木和之さんのドキュメンタリー番組「明日世界が終わるとしても」のDVDを貸出中。事務局洋光台キリスト教会(蛭川明男牧師) TEL 045-774-9861にお申込み下さい。

● 佐々木さんを支援する会主催「第3回ルワンダ・和解の現場・訪問ツアー」を2019年9月初旬におこないます。虐殺の現場を訪ね、その悲劇を心に刻みつつ、佐々木さんの活動現場を訪問します。ぜひ、今からご検討ください。詳細は、今後ウブムエ等で紹介いたします。

● 佐々木さんのルワンダでの活動は13年を超え、加害者と被害者の和解の取り組みに加えて、現在、非暴力・草の根で平和と和解を構想する若者たちを育てる働きを中心に据えています。長きにわたるご支援をありがとうございます。このような支援会形態で、長期間活動出来ていることに深く感謝いたします。同時に、これまで趣旨に賛同し支援をしてくださった方々が、徐々に支援を継続することが困難になっているのも現実です。佐々木さんの活動が続けられるために、年間100万円ほどさらに必要があります。ぜひ、支援会にご友人をお誘いいただけませんか。ご紹介いただけますならば、趣意書、申し込み葉書をお送りいたします。どうぞ、よろしく願いいたします。

● 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

●佐々木さんを支援する会HP(ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

●世話人会 加藤 誠(大井教会牧師)、中條智子(長住教会牧師)、播磨 聡(広島教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、米本裕見子(日本バプテスト女性連合幹事)